

- (2) 西宮一民氏『古事記』頭注。中西進氏「古事記抄―安康記・雄略記―」(『論集上代文学』第六冊所収)。
- (3) 岸俊男氏「ワニ氏の基礎的考察」(『日本古代政治史研究』)。
- (4) 西宮一民氏『古事記』頭注。
- (5) 倉野憲司氏『古事記全註釈』第六卷三五七頁。
- (6) 『日本古代文学史』四八頁。
- (7) 日野昭氏「安康・雄略紀について」(『日本書紀研究』第六冊所収)。
- (8) 三谷栄一氏「磐姫皇后と雄略天皇」(『万葉集講座』第五卷所収)。
- (9) 同右。
- (10) 土橋寛氏『古代歌謡全注釈』日本書紀編二五二頁。
- (11) 『記伝』以来、舎人のものとする説が多く、天皇のものとする説に土橋寛氏、荻原浅男氏などがあ
る。
- (12) 土橋寛氏『古代歌謡全注釈』古事記編三四五頁。
- (13) 「記紀歌謡全講」一八九頁。
- (14) 土橋寛氏『古代歌謡全注釈』古事記編一一〇頁。
- (15) 『古代歌謡全注釈』日本書紀編九四頁。
- (16) 『日本文学における美の構造』四八頁。
- (17) 拙稿「石之日売の物語」調布学園女子短期大学紀要十号。

五 むすび

若日下部王に対する雄略の歌の「その思ひ妻 あはれ」にこめられた心情は、思い妻に対する讃嘆であると解釈したい。それは書紀にみる、「善言」を得て喜ぶ雄略像に相通じるものであろう。

こう考えてみると、書紀における「聖天子」像を支えるものとしての皇后の像もかなり新しいものと思われるが、若日下部をめぐる雄略求婚説話は、そうした書紀的世界ができてからの、さらに新しいものと考えるべきだろう。

混沌とした古代日本の強力な建設者の一人として、雄略の像は酷薄、苛烈、強暴なものにならざるを得なかったのだらうが、そうした天皇の皇后として必要とされたものこそ、賢女としての若日下部王ではなかったか。思えば、「聖帝」仁徳に配されたのは「怒れる」大后石之日売⁽¹⁷⁾であった。その丁度逆の関係がここにある。

雄略紀の冒頭に位置するこの求婚伝承に、目的に向かう王者の情熱が見出せないのも、それは雄略を主人公としながら賢女としての若日下部王の像を語りたかったためではなかっただろうか。暴君雄略をいさめるこの若日下部王の器量は、日継の皇子にも代りうる、生ませ女大後の宝として、あるいは後宮で語られたこともあったかもしれない。この伝承の場の問題については、又、他日を期したい。

注

(1) 荻原浅男氏『古事記』頭注。倉野憲司氏『古事記全註釈』第七卷二二七頁、など。

れている「尾張に 直に向へる 一つ松阿波例……」（景行紀二七）、鮪臣が乃樂山で殺された時の「……泣き沾行くも 影媛阿婆例」（武烈紀九四）、聖徳太子が行き倒れた飢者を見てうたったとされる「しなてる 片岡山に 飯に飢て 臥せる その旅人阿波礼 ……飯に飢て 臥せる その旅人阿波礼」（推古紀一〇四）などが歌謡にみられる例である。というのも、本文には、仁徳紀三八年七月の「菟餓野の牡鹿」における「其の声、寥にして悲し。共起可憐之情」の「可憐」を「あはれ」と訓みうるとするところには万葉集的情緒の一端を見出しうるのだが、今はそれにふれる紙幅がない。

ともあれ書紀の歌謡の例については、景行紀の「あはれ」は物語に即して考えれば「一つ松」に対する賞讃である。原歌は、古事記に「吾兄を」とあるところから雑詞とも考えられているが、そこに木讀めの意味を認めても間違いではあるまい。一方、以上の解釈とかなり異なる趣きをみせているのが「影媛阿婆例」であり「旅人阿波礼」である。前者が葬送の歌であり、後者が行路の飢者を見て詠んだものである以上、それらは同情・憐愍・哀傷といった心意を含んでいるものと考えうる。すなわち、記紀歌謡初期の「あはれ」はやや陽性の感動詞といった趣きがあり、その後期のものに至って、感動が内的に沈潜してゆき同情・憐愍・哀傷といった情緒の表現になってゆくと考えられなだろうか。その、初期から後期への過渡期にあるものが、書紀の出雲振根のだまし討ちの説話の中で「時人」に託された「……さみなしにあはれ」だと思われる。本来は倭建の出雲建征伐伝承と共にあったものが、後期の情緒的表現を含む「あはれ」の登場の段階で新しい意味が付加され「時人」に託されたのではあるまいか。

に、古事記の場合は物語歌として戦いの物語の中にうまく詠みこまれていたのが、書紀の場合は、異質な物語の場に設定されたためにその意味があいまいになってきたとすべきだろう。

允恭記の軽太子の歌にみられる「思ひ妻阿波礼」は、諸注、感動詞として「ああ」と口訳しており特に説明はないが、池田勉氏の見解⁽¹⁶⁾は傾聴すべきものである。この「あはれ」には「思ひ妻」に対する万感が——妻への愛情も、妻の心ばえへの賞讃も、流謫の地で妻とふたび相見た哀歎も、その伝説の照射によって、この一語のなかに歌いこめられており、それは万感をこめて「思ひ妻」を、ほめ嘸^{はや}す意の「あはれ」である、といわれる。この軽太子の歌は難解歌としてその解釈もあまり明快になされてはいないが、その歌の中心が、二度くりかえしのあるこの「思ひ妻あはれ」にあることは確かであり、それだけにこの言葉の意味するものは大きいはずだ。心中という結末を迎える物語の展開の中にあるものの、この歌（八九）は、恋慕のあまりはるばる伊予の地まで追って来た衣通王を待ち迎えた時の太子の歌とされているものであり、ここまでは死の予測は、ない。哀歎という翳りもほのめくものの、愛情のこめられた賞讃、讃嘆の意味をもつ「あはれ」がこの場合のものと思われる。

雄略の若日下部王に対する「その思ひ妻あはれ」も、右に言う賞讃、讃嘆のこめられた「あはれ」と考えて良い。太子の場合には、物語の展開上、哀歎という要素が加わっていたが、この王者の場合、それに代わるものを求める必要もないだろう。

古事記の「あはれ」は歌謡においてのみ右の三首にみられるだけだが、それらはまさに「あはれ」の原初の様相を示している。もちろん書紀にも他にいくつかの用例はある。すでに述べた出雲振根の場合の他、日本武尊の歌とさ

この「思ひ妻あはれ」は周知のように允恭記の軽太子の歌にもみられるものであり、記紀の「あはれ」の用例中「思ひ妻」と「あはれ」とが結びついたのはこの二例のみである。そうしたところから「痛切なひびき」を求める意味づけも生まれてくるのだろうが、軽太子の場合とて、むしろ「讚嘆」に近い解釈の方が、原歌の意図するところであつたと思われる。

次に記紀における「あはれ」について少し検討してみよう。

古事記における「あはれ」は三歌に用いられている。

〔景行記〕 やつめさす出雲建が佩ける刀黒葛さは巻きさ身なしに阿波礼(二四)

〔允恭記〕 ……大峰よし 仲定める 思ひ妻阿波礼……梓弓 起てり起てりも 後も取り見る 思ひ妻阿波礼(八九)

〔雄略記〕 ……たしみ竹 たしには率寝ず 後もくみ寝む その思ひ妻 阿波礼(九一)

景行記の歌謡は倭建がだまし討ちにした出雲建に対するものである。その解釈も『記伝』以来の憐憫説、『言別』のサミナシを「銷無し」と解して出雲建の真剣を讚めたとする説、さらには嘲笑説などに分かれるが、土橋氏の言われるように、だまし討ちにしておきながらその相手に同情する歌をうたうのはおかしいし、またその相手の力を讚めるのもおかしいとすべきであり、嘲笑説が妥当と思われる。陽気な笑いの感じられる「あはれ」であろう。一方、この歌は書紀の崇神紀に出雲振根が弟の飯入根をだまし討ちにする時のものとして用いられているものでもある。ここでの作者は「時人」⁽¹⁴⁾であつて第三者ということになる。だまし討ちの当人がうたったものではないことになると、古事記の場合のように解釈もすっきりいかず、同情・憐憫の意味が強くなってこよう。それも、土橋氏の言われるよう⁽¹⁵⁾

はあったことだろう。そうした後宮に君臨する草香幡梭皇後の存在は、やがて伝説を生むほどにまでなっていたのではなからうか。そうした世界が端的に形象化されたものこそ、古事記の求婚説話ではなかっただろうか。雄略紀五年二月の葛城山での狩猟の事件の際、皇后の諫言が舍人の生命を救ったが、その時の雄略は「万歳」といいながら楽しきかな。人は皆禽獸を獵る。朕は善き言を得て帰る。

といったというが、喜んで帰る雄略の姿はまさに豪放磊落そのものであろう。直前の怒りも瞬時にして消え失せなかつ喜びの感情に浸り得るといふ王者——それは、若日下部王に求婚したものの「不吉な故に……」と拒絶され、帰途「……いくみ竹　いくみは寝ず　たしみ竹　確には率寝ず　後もくみ寝む　その思ひ妻あはれ」とうたったとされている雄略像に重なる。この歌の中心は「後もくみ寝む　その思ひ妻あはれ」にあると思われるが、この「あはれ」は、讚嘆の意を示すもの、と私は解釈したい。

この「あはれ」については、「感動詞」とあるくらいで諸注あまり触れていないが、武田祐吉氏⁽¹³⁾は「前半が大きいだけに、後半がもの足りない。かつ痛切なひびきを伴わないのは、既に約束が成立しているからであろう。」といわれる。「痛切なひびき」とは共寝が成就しなかったことの悲しみをいうのだろうか。この「あはれ」に、あるいはこの歌に、そうした哀切さを求める方がおかしくはないか。権力の前には不可能なことなどあり得ないはずの王者に、なぜ今さら湿っぽい感情が必要なのであろうか。王者の求婚への、勇氣ある諫言に納得したからこそその帰還であろう。「後もくみ寝む」と再会を約し、「思ひ妻あはれ」とうたう心は古語拾遺にみる「あはれ、あなおもしろ、あなたなし、あなさやけ、をけ」の「あはれ」の気分にはやや近いものと考えたい。

大草香皇子の命は奪われることになるのだが、当初のその使者への返答は反正天皇の皇女の場合とまさに対照的である。大草香皇子は

……今陛下、其の醜みにきことを嫌きらひたまはずして、苜菜むなめの数かずに満みひたまはむとす。是、甚おほに大恩なり。何ぞ命おほみことの辱かたじけなきを辞いなびまうさむ。

として「丹心」を表すための押木珠纒しじまを捧たもったという。

反正の皇女の「命を奉うけたまはること能あたはず」に対応するのが「何ぞ命の辱かたじけなきを辞いなびまうさむ」であろう。しかも「大恩」であるともいう。さらに大草香皇子のいう「其の醜みにきこと」は反正の皇女らの「顔色秀すれず」に相当しよう。彼女達が辞退の根拠とした理由の一つはここにみられるものの、大草香皇子の受諾の反答の中には、他の「情性拙せつし」に相当するものがない。右の引用には省略したものの、兄としての皇子が「妹幡梭皇女の孤みなしこなるを以て」と他に兄弟姉妹のいない身を案ずる様も記されるからには、孤独なる妹が救われるという意味もあつたではあるう。しかし、右の文面で見ると限り「若し威儀言語、毫毛けのすゑばかりも王の意に似かなはずは……」という心配はしていなかったということになるう。すなわち「人の心を思い遣やることに長け」た伶俐なる女性が草香幡梭皇女だったのでなかつたか。事實は知る由もないものの、書紀編者の筆致は、そうした伏線を設定した上で、立后以後の、雄略の皇后の諫言へと至つているのではなからうか。

雄略帝の後宮には皇后以外三人の皇妃が居並ぶことを書紀は伝える。次代の清寧帝をなした葛城氏出身の韓媛からひめ、吉備氏出身の稚姫わかひめ、春日和珥氏わに出身の童女君をみななど、各氏族勢力を負うて入内したきた女性達の目に見えぬ抗争もそこに

儀言語、毫毛ばかりも王の意に似はずは、豈親びたまはむや。是を以て、命を奉ること能はず」とまうしたまふ。遂に遁れて聴けたまはず。

大泊瀬皇子の強暴さは遍く知られており、その皇子に嫁すことは「命を奉ること」であるという。そして「遂に遁れ」たというのだが、その理由として、「顔色秀れ」ぬこと、「情性拙し」ということをあげる。

後に、雄略帝の怒りを鎮めるために美しい采女日媛を迎えに出させると

天皇、采女の面貌端麗しく、形容温雅なるを見て、乃ち和顔悦色びたまひて……

とある以上、「顔色秀れ」ていることは、やはり美点であったのだらう。これは雄略二年十月の御馬瀬の事件の時のことであるが、この時の雄略の心を和らげたものには、この美女の他に皇太后の配慮があった。宋人部設置起源を語るものとしてそのことはすでに記したが、その皇太后に雄略は

「善きかな。鄙しき人の云ふ所の、『貴、心を相知る』といふは、此を謂ふか」

といったという。反正天皇の皇女らが「情性拙し」といったというのも、こうしたことをさすとみてよいだらう。人の心を思い遣ることに長けていないというのである。

もっとも、この反正皇女の事件には、その背後の雄略と氏族勢力の関係を想定する見解もあるが、そうした史実の有無より、今は、書紀編者の筆によって造型されていく雄略帝とその周辺の人々のあり方に注目したい。

さて、この反正天皇の皇女らの次に登場するのが、若日下部王である。書紀では草香幡梭姫皇女とも幡梭皇女ともいう。求婚の使者にたった根使主は、その兄の大草香皇子からの礼物押木珠纒に目がくらみ、その讒言によって結局

たのも、雄略の強暴性を語る中で、賢女としての皇后の登場を無理のないものにするためではなかったか。雄略の「……舎人を斬らむとしたまふ」という行為と「皇后、聞しめして悲しびたまひて、感みおもひを興して止めまつりたまふ」という皇后の登場とを結びつけるものがこの舎人の歌である。そう考えなければ処刑に臨んでその原因でもある榛の木の歌をうたうという疑問は解けない。書紀の場合は「木讚め」の意味はもはや失われているとしなければならぬだろう。「……猪の唸り声が恐ろしきに、私は逃げ登った、岡の上の榛の枝に」とその行為を述懐する内容の歌にすぎない。しかし、物語の展開上は、悲痛なこの舎人の叫びが皇后の心を動かしたことになる。そして、それは諫言へと発展していった。

四 思ひ妻あはれ

右に、賢女としての皇后の存在をみてきたわけだが、その伏線ともいえる挿話が安康紀に伝えられている。雄略帝がまだ大泊瀬皇子時代のことである。

若日下部王を妻として迎える以前、大泊瀬皇子は反正天皇の皇女らを妃に迎えようとして一蹴されたという事件が記される。安康即位の十二月のことである。

是に、皇女等、皆対こたへて曰したまはく、「君王きみ、恒つねに暴く強くましましき。儼たちまち忽いかりおこに忿起りたまふときは、朝に見ゆる者は夕には殺されぬ。夕に見ゆる者は朝には殺されぬ。今妾等やつこ、顔色秀すくれず。加以また、情性拙ひととなりつたなし。若し威おそ

に対し雄略は

楽しきかな。人は皆禽獸を獵る。朕は獵りて善き言を得て歸る。

と喜びつつ帰ったという。これは諫言を受け入れる「聖天子」を語るだけでなく、「善言」をなした皇后をも讃えるものと解釈すべきであろう。

この葛城での狩獵のことと右の舎人の歌は古事記にもみられるものである。しかしそこではもっと簡略に語られており、手負いの猪に恐れをなした天皇が榛の木に逃げ登ったこと、そこで、右の舎人の歌を天皇自らがうたったことなどが伝えられているにすぎない。

従来、この歌を天皇のものとするか、舎人のものとするかで見解が分かれてきた⁽¹¹⁾。たしかに、どちらのものにしても疑問は残る。「我が逃縁^{のぼ}りし」の句は書紀の舎人が逃げ登ったとする方が無理はない。しかし、この歌を倭建の物語にみられる「一つ松」のように木讃めの歌とするなら、木に逃げ登ったことが原因で今処刑されようとしている舎人がその「榛の木」を讃める歌をうたうというのもやはりおかしい。

物語の展開からすると、榛の木に逃げ登って助かった天皇がその木を讃えてうたったものという、古事記の方が納得がいく。「やすみしし我が大君の遊ばしし」から「我が逃縁^{にげのぼ}りし」という人称の轉換に表れた矛盾も、形式的には「物語述作者の手になる物語歌」⁽¹²⁾と考えれば理解できるし、意味の上でも、これを木讃めの歌と解すれば「私が逃げ登って助かった」の意で不都合はない。

こうした古事記の形に、舎人と皇后が加わって成ったのが書紀の場合であろう。そこでこの歌が舎人のものとされ

雄略帝が長谷の百枝槻ももえつきの下で「豊楽とよのあかり」をしていた折、その百枝槻の葉が蓋かさに浮いているのを知らずに三重の采女が大御蓋を献たまったというのが原因で、その采女は斬られそうになったという。その時も又、「纏向まきの 日代の宮は 朝日の 日照る宮……」(記一〇〇)という天皇讚歌をうたって救われているのである。

この記紀の三例はいわゆる「歌の徳」によって生命が救われたものとみなし得よう。木工御田を救った歌の奏者は帰化人秦酒公とされているが、木工真根の場合は「同伴巧者あひたくみ」とされているのみである。これは「真根の仲間の工匠」をさし「時人」的存在(10)といわれているものであって個人名ではない。歌の主が明記されていないということは、その奏者の功より、歌そのものの功に重きがおかれていたことを語るものだろう。

以上の雄略朝の生死の記録の中で、自身の力によって人の生命を救い得たのは、唯一、皇后とされていたことがわかる。

雄略五年二月、臆病な舍人は草の中から突進してきた嗔猪いかりぶを恐れて傍らの樹に逃げ登り、結局、天皇が嗔猪を刺し止めたという事件が語られる。狩猟が終わった後、その舍人は処刑されそうになるが、その時に臨んで「やすみしし我が大君の 遊あそばしし 猪うたきの怒声かしこ畏かしこみ わが逃縁にげのほりし 在丘ありをの上の 榛もみぢが枝 あせを」とうたう。これを聞いて皇后はその処刑を止めたという。皇后の諫言によって、その舍人は事なきを得たというのである。

国人、皆陛下きみを謂まうして、安野あきのしたまひて獸を好みたまふとまうさむ。無乃むしろよ可よからざるか。今陛下きみ、嗔猪ししの故を以て、舍人を斬りたまふ。陛下、譬たとへば豺狼おほかみに異なること無し。

皇后は、今もし嗔猪のことで舍人を斬ったら、大王も譬えれば狼と異なることはないでしょう、といさめたが、それ

を「悦び」に変えている。

この説話は穴人部設置起源譚ともいわれているが、ここでの皇太后の機転は注目されるにしても、その働きは事後における収拾策である。雄略帝の群臣への問いに対して即座に応じる者がいなかったということに発するこの怒りは、誅殺者を出すに値するものではなからうが、皇太后の機転も不当な犠牲者を救うものではなかった。

一方、それに類した不当な怒りによって、一度は危機に瀕したものの、すんでの所で生命が助かったというのが左記の例である。

I 舎人（五年二月）

II 木工鬪鷄御田（二年一〇月）

III 木工韋那部真根（二年九月）

木工御田は伊勢の采女を姦したと疑われ、木工真根は雄略の奇策にかかった故の失敗が理由であり、いずれも処刑に値する正当な理由はない。それが施行されれば誤って人を殺した例になり得るものであるが、彼らは秦酒公と同伴巧者の歌によって救われる。秦酒公の歌には「……伊勢の野の 榮枝を 五百経る析きて 其が尽くるまでに 大君に 堅く 仕へ奉らむと 我が命も 長くもがと 言ひし工匠はや……」とあるように帰順表明の意がこめられており、同伴巧者の歌は「あたらしき 韋那部の工匠 懸けし墨繩 其が無けば 誰か懸けむよ あたら墨繩」と、墨繩に託して工匠の腕をほめ讃えたものである。

歌によって生命が救われたという例は書紀のみならず古事記にもみられるものであり、三重の采女の場合がある。

雄略紀には幾多の誅殺伝承がみられるが、それらは、真実性はないとされていながらも苛烈な雄略像をみせるものとしては興味深い。即位以後のそうした例には

I 百済の池津媛と石川楯 (二年七月)

II 大津馬飼 (二年一〇月)

III 吉備下道臣前津屋及びその一族七十人 (七年八月)

IV 凡河内直香賜と采女 (九年二月)

V 根使主と小根使主 (一四年四月)

などがあり、これらには、大津馬飼の場合を除いて一応誅殺に値する理由があるものと思われる。百済の池津媛とは百済の加須利君が貢った采女であり(五年二月)、石川楯と共に「姪け」の罪で焼き殺されたという。同様の例が香賜と采女の場合であろう。吉備下道臣前津屋の場合も、その奇怪な行為が「天皇を呪咀する」ものであった(古典大系『日本書紀』頭注)なら、反乱予備軍ともみなしうる。根使主は安康紀に記される押木珠纒に眩惑されて皇后の兄大草香皇子を讒言し、死に至らしめた張本人であり、小根使主はその子であった。

大津馬飼が雄略の怒りにふれて斬られたのは、御馬瀬での狩猟に際してのことである。狩猟の後、群臣に「猟場の楽は、膳夫をして鮮を割らしむ。自ら割らむに何興に」と問うたというが、群臣はすぐには答えることができず、ついに雄略は「大きに怒りたまひて、刀を抜きて御者大津馬飼を斬」ったという。宮に戻った天皇を宥めたのは皇太后と皇后であったが、さらに皇太后は事件の顛末を聞き、腕の良い料理人膳臣長野を貢ることによって、雄略の怒り

大王雄略の踵を返させたその王の「力」こそ、生まず女であつた大后の、日繼の皇子にも代わる宝だつたのではあるまいか。

三 葛城の諫言^{かん}

書紀における雄略像の苛烈さは周知のことであり、大悪天皇が有徳天皇でもあり得るその人間性は悪に強いことは徳にもすぐれているという『史記』や中国の「烈女伝」などにみる発想⁽⁸⁾であろうか。

天皇、心を以て師としたまふ。誤りて人を殺したまふこと衆^{おほ}し。

として人々に誹謗されたという「大悪天皇」には、賢女としての皇后の像が必要とされたのであろう。強暴な雄略を語る書紀は一方でそうした皇后の姿を語るのである。

葛城山での狩猟に際して、激怒した雄略に処刑されそうになった舎人が、皇后の諫止によって救われたという挿話がある(雄略紀五年二月)。いわゆる諫言説話ともよばれているものであるが、それは「諫言を容れる中国的な聖天子」の造型を意図したものと⁽⁹⁾もいわれており、その「聖天子」化を支えているものは、賢女としての皇后像といえよう。誤つて人を殺したことが多かったという雄略の激昂を静め、舎人の生命を救つたと伝えているのである。他にも、雄略が正当な理由なくして人々を斬ろうとした例はあるものの、この皇后のような、諫止によって人の生命が救われている例はない。いわゆる「歌の徳」ともいわれる歌の力で救われている例は二例ある。

意味があるにしろ文脈上での意味するところは「日下での共寝」に対する拒絶である。それはその後の「……いくみ竹　いくみは寝ず　たしみ竹　たしには率寝ず　後もくみ寝む……」の雄略の歌の言葉とも呼応する。この拒絶も、当時の婚俗としてあったといわれる、「最初の拒否」とは思われない。二度目であろうと翌日であろうと皇子出生を記し得ないこの王には求婚受諾の伝承は成立し得なかったと考えるべきだろう。

その拒絶の背景には、日の御子たる天皇が日を背にして大和から河内へ求婚に出掛けるのは不吉であるという信仰があったのだろうか。いささか釈然とはしないものの、今はこの説に従っておく。というのも、そうした信仰があったのなら、雄略はそれを承知で日を背にして出向いて来ていることになるからである。しかし、考えようによっては、それも雄略帝らしい無謀さとも思えてくる。古事記においても、日下への途次、志幾の大県主の家が「天皇の御舎みみくらに似て」という理由のみでその家を焼かせようとした暴君として登場しているのである。求婚旅行に際しても、その方角などには一切関知せずと考えれば事はすむ。

若日下部王の拒絶の言葉が、こうした暴君に対するものであったなら、実はその言葉こそ、無謀な行為をいさめたものであったと解釈できよう。すなわち諫言かんげんである。書紀にはさまざまな悪逆無道の行為が伝えられる雄略帝である。もちろん書紀的世界とは別に古事記の世界を考えなければならぬが、この古事記にも盡に浮いた一枚の葉のために采女を斬ろうとした雄略の姿はある。そうした暴君雄略に諫言できた者こそ、未来の太后である若日下部王であったと、右の冒頭伝承は語っているのではあるまいか。ここから照射される王のイメージは、仁徳の威光の下にあるものではなく、存在そのものが雄略帝に拮抗し得る力をもった皇后としてのそれであろう。

神武・応神の求婚説話の結末は皇子出生のことであった。「聖婚」が君主にとって重大な意味をもつであろうことも十分想像できるが、その「聖婚」も、求婚説話の中にあつては、あるいは古事記的説話の展開過程にあつては、皇子出生のことがあつて始めて意味のあるものになつたのではあるまいか。

皇子を生むことなくして若日下部王の後宮における地位が安泰であつたのは、父帝仁徳の威光であらう。しかし、皇子なくして、伊須気余理比売や矢河枝比売と並ぶ求婚説話が現伝するのは皇女という血統上の理由からではあるまい。皇子誕生に代わる、何らかの「力」が生まれず女であつた若日下部王の求婚説話を支えてきたとみるべきであらう。

この若日下部王の物語を古事記が載せた意味について、「単純な妻問ひ物語としてではなく、天皇の威権と、これに奉仕するものものとするべき態度を暗示したもの」という見解がある。たしかに、志幾の大県主をめぐる「御幣献上」事件までの前半には天皇の権威の誇示という意図は認められる。しかし「中心は若日下部王が天皇の河内行幸を畏れ多いとして大和へ参向することを申し出た点にある」として、その王の行為こそ「奉仕するものものとするべき態度」とされるのは疑問である。

右に述べた神武・応神伝承から見る限り、「仕へ奉らむ」という承諾の返答と共に狭井河の上の伊須気余理比売の家で「一宿御寝坐し」たこと、天皇の意を受け入れ「大御饗」を献つて、丸邇氏が恭順の意を表したこと——などこそ、求婚を受けた側のものとするべき態度であつたと考えられる。

若日下部王の「日に背きて幸行でましし事甚恐し。故、己直に参りて仕へ奉らむ」という言葉は、背景にどんな

が系譜にしか見えないところをみると、右の求婚説話の目的は、やはり、皇太子誕生の由来を語るころにあったのだろう。

こうした「聖婚」伝承の裏に潜むその政治的意義を考えてみるにつけ、雄略の場合は、神武・応神の求婚説話の要素を全く有していないことがわかる。右の「聖婚」のこと、皇子出生のことも、もちろんない。

西郷信綱氏によれば⁽⁶⁾「自然の豊饒にたいし責任をもつべき君主の結婚は重大」であるという。雄略記が恋愛・結婚のことに全くふれない巻であるというのなら話は別だが、殊の他恋愛譚を多く載せる巻である。しかも大后の求婚説話をその冒頭に位置せしめながら、重大な意味をもつはずの「聖婚」を語らないのは、やはりそれなりの理由があったからに違いない。もっとも、単に、日下の伝承が雄略に結びついたにすぎないという考え方もできる。しかし、若日下部王の、あの求婚拒絶の言葉の背景には、「聖婚」を語らざる理由に結びつく何かがあると考えざるを得ない。系譜を辿ってみると、若日下部王とは、子を生むことのなかった皇后である。そのことを古事記は雄略記系譜の中で

天皇、大日下王の妹、若日下部王に娶ひたまひき〔子無し〕。

と、注記をする。こうした特記は書紀にはみえないものだが、古事記はさらに仁徳記において

……又庶妹八田若郎女に娶ひまし、又庶妹宇遲能若郎女に娶ひましき。此の二柱は御子無かりき。

と伝える。歴代皇妃の中でこの三人だけが皇子、皇女をなしていないが、皇后の中ではこの若日下部王が唯一人、子のない大后であったことになる。ことはすべてここに端を發していないだろうか。

あつたからである。

しかし問題はこれからである。

神武と応神の求婚説話は続いて各々の聖婚のことを語り、皇子出生のことを記す。両伝承とも次代の担い手たる皇子たちの出生の記録をもって結びとしているが、このことも又こうした求婚説話の重要な目的であつたに違いない。

神武と伊須気余理比売の聖婚は

……其の伊須気余理比売の家、狭井河の上へに在りき。天皇、其の伊須気余理比売の許に幸行でまして、一宿ひとよ後み寝坐しき。

と記され、その夜の回想の歌（記二〇）に続いて皇子誕生のことが語られる。

然してあれ坐しし御子の名は、日子八井命、次に神八井耳命、次に神沼河耳命、三柱。

応神と矢河枝比売の場合も、近江行幸の当初、小幡村で逢った麗美うるはしきを嬢子むすめと今「対むかひ居る」喜びをうたった天皇の歌（記四三）に続き

如此御合かくみあひしまして生みませる御子は、宇遅能和紀郎子なり。

という婚姻・出生記録のような記述がある。これについては倉野氏も指摘されるように、応神が格別に鍾愛した「宇遅能和紀郎子の出生の由来を、歌物語に仕立てたもの」⁽⁵⁾とも考えられよう。結局、次代を担うのは嫡流の兄大雀命ということになったものの、応神がこの宇遅能和紀郎子に「天津日継を知らせ」として、皇位継承者の地位を与えていたことは、記紀共に伝えるところである。矢河枝比売には他に八田若郎女、女鳥王という二皇女があつたが、その名

いて、矢河枝比売を「太后」に準ずる者と考へても不都合はないだろう。

そこで、三伝承を比較してみるとおもしろい現象があることに気付く。神武天皇と伊須氣余理比売、応神天皇と矢河枝比売という二つの求婚説話にはいくつかの共通性がみられるが、雄略天皇と若日下部王の場合のみが異質なのである。また、その異質さこそが本伝承の特質であり、その多くは若日下部王の存在そのものに負うていないかとも思われる。

まず、三伝承の比較から始めよう。

神武・応神求婚説話に共通するものは、女性の側の出自が明瞭に語られていること、服属の証の表現が存在すること、などである。このことは伊須氣余理比売が「神の御子」——美和の大物主神と三嶋の湟みそくひ昨の女勢夜陀多良比売との間の御子——であったこと、また宮主矢河枝比売が奈良県添上郡櫛本町の東北、和爾の地を本拠とする大和の大豪族丸邇(3)氏の子女であったこと、などを思えば不思議なことではない。神武天皇の正妻は「神異の人である必要もあつた」(4)だろうし、丸邇氏がその子女の後宮入りを氏族の誉れとして、その伝承を温めてきただろうことも理解できる。天皇の妃たるものの出自を明らかにすることにはそれぞれの理由があつた。

一方、伊須氣余理比売が求婚受諾の意味をこめて「仕へまつらむ」と言い、矢河枝比売の場合は、「……恐し。我が子仕へ奉れ」という父の答えと共に「大御饗みあへを献りし時、其の女矢河枝比売命に大御酒盞を取らしめて献りき」という比売の行為も、支配と服属の関係を語るものとして理解できよう。

この出自の由来や服属の証の表現は、むしろ、若日下部王の場合には、ない。若日下部王とは、大王仁徳の皇女で

と天皇に奏さしめたことにより、雄略はそのまま帰還した、というところにある。

若日下部王のこの言葉について、太陽に背中を向けて求婚に出掛けることを不吉とした信仰に基づくもの、という解釈があるが、⁽¹⁾偉大な雄略の踵を返させたこの言葉の力には、何か超越的なものを感じざるを得ない。もちろん、求婚を受けた女が最初は男を拒否するという昔からの婚俗があった⁽²⁾という見解も存在する。その類例として引き合いに出されるのが八千矛神と沼河北売、倭建命と美夜受比売、さらに風土記説話などである。こうした例のある限り、求婚拒否という、婚俗や伝承の型の存在を認めるにしても、求婚説話のすべてにそれが見られるというわけではない。現に、雄略記の吉野の童女の場合

天皇、吉野宮に幸行でましし時、吉野川の浜に童女有り。其の形姿美麗^{かたちうるは}しかりき。故、是の童女に婚ひまして宮に還り坐しき。

には、短い伝承の中で問題もなく結婚成立のことが伝えられる。

また、神武・応神の求婚説話にも求婚拒否の例はみられない。そこではむしろ「仕へ奉」という意志表明こそ求婚説話の要であったように思われる。若日下部王が雄略の「大后」であるなら、こうした天皇と大后という次元で、求婚説話を比較するのも一案であろう。もっとも、応神の場合は宮主矢河枝比売への求婚であり、この比売は「大后」の位置にはない。応神記は十名の妃を記すが「大后」の特記はなく、書紀が「中日売命」を「大后」と記すのみである。それは中日売命が次代の帝王仁徳をなした故であろう。対して古事記に求婚説話をもつ矢河枝比売は宇遲能和紀郎子の母である。宇遲能和紀郎子は、応神が一度は「天津日繼を知らせ」と命じた皇子であった。その意味にお

と雄略の求婚に応じる気配をみせず、雄略はそのまま帰還し

日下部の こちの山と 疊薦たたみこも 平群へぐりの山の こちこちの 山の峽に 立ち栄ゆる 葉広熊かし白檮かし 本には いくみ
竹生ひ 末方には たしみ竹生ひ いくみ竹 いくみは寝ず たしみ竹 たしには率寝ず 後もくみ寝む その
思ひ妻 あはれ

の歌を使者に持たせて、王の許に返したという。

そこには国見的要素もあり、専制君主的一面も語られてはいる。しかし、若日下部王と対峙してからの雄略の行動——王の言うままに帰還し、帰途、「……思ひ妻あはれ」とうたう、その姿には、岡の辺に逃げ隠れた媛女むすめを捜し出そうとして「……金鈕も 五百箇いほちもがも 鈕いほちきはぬるもの」（記九九）とうたったという、かの王者の強烈な印象はない。

それは、この伝承が雄略を主人公とした求婚説話という形をとるものの、実は若日下部王を語ることに目的があったからではなかっただろうか。その若日下部王とは、一体、どのような皇后であったのか。

二 生まず女 大后

本伝承の特質は若日下部王が

「日に背きて幸行でましし事いとかしこ甚恐し。故、己直に参上りて仕へ奉らむ」

若日下部王の物語

— 雄略求婚説話をめぐって —

阿部 寛子

一 はじめに

雄略記冒頭伝承は日下の若日下部王を妻問う話である。

それは、まず「己が家を天皇の御舎みあらかに似せて」造っているという理由で志幾の大県主の家を焼かせようとする事件から語り始められるが、この伝承の中心は、やはり若日下部王が登場する後半にあるとみるべきだろう。その若日下部王に「妻問いの物」として贈った「布をかけ鈴をつけた白い犬」も、志幾の大県主が許しを請うて献上した「のみの御幣みまひの物」であり、その由来を説明するのが右の事件だったと解釈し得るからである。

続いて登場する若日下部王は

「日に背きて幸行でましし事甚恐いとし。故、己直に参上りて仕へ奉らむ」